東日本大震災　復旧・復興のとりくみ

みやぎ生協

● 食のみやぎ復興ネットワーク「わたりのそばプロジェクト」～そばの種まき会～

「わたりのそばプロジェクト」は、花見会、試食会、販売開始会などのイベントの開催と情報発信を行いながら、昨年末には、県内メーカー（だい久製麺：仙台市青葉区）の手による「復興亘理そば」を発売し、短期間で 6,500 パックを販売しました。

組合員も参加してそばの種まき

今年は、現地での様々な農作業体験を通じて、被災地の今を感じながら、ソバの生育を見守っていく計画です。8 月 11 日（月）そのスタートとなる「そばの種まき会」が亘理郡山元町で開催され、生協組合員 20 人が参加しました。

この地には震災前、県内唯一のワイナリーだった桔梗屋長兵衛商店（津波被害を受け廃業）がありました。この跡地が荒れてしまうことを防ぐため、地域の方々が昨年からソバの栽培を行っています。

種まき会当日は、全員で津波が運んだ堆積物の撤去をした後、ソバの種を撒きました。種は 5 日程度で発芽し、1 ヶ月後には花畑が拡がり、2 ヶ月後には収穫の時期を迎えます。

（店舗商品本部･食のみやぎ復興ネットワーク事務局　藤田孝）

生協あいコープみやぎ

● 「放射性指定廃棄物最終処分場反対署名」３，０９３筆を、加美町へ提出！

7 月 23 日（水）あいコープでは、組合員に呼びかけて集まった「放射性指定廃棄物最終処分場反対署名」3,093 筆を持って、加美町役場を訪問し、猪股洋文町長と、三浦靜也 JA 加美よつば組合長に直接手渡しました。

地元の方たちの切実な現状を目の当たりにして、この問題は私たち組合員の食卓が脅かされる大変な問題だと改めて気付かされました。なぜなら、「みちのく路　流れる水は一番清水」と詠われる通り、加美町は宮城県にとって大切な鳴瀬川の源流がある場所だからです。

鳴瀬川は、大崎市、美里町、大郷町を流れ、東松島へ行き着き、海へと繋がっているのです。源流が侵されることによって、私たちの生産者の努力を水の泡にしてはいけないのです。福島第一原発事故後の風評被害からさらなる実被害が起こってしまうことは許されません。宮城県は一番に県民の命を守る事を考えるべきです。いくら国の方針であっても、地元住民の合意なしで進められるわけはありません。子どもたちの未来を考えるのなら、県民全体で自分たちの問題だという思いで反対の声を高めていくことが必要ではないでしょうか。

小野瀬裕義理事長（左）が
猪股洋文町長（右）に署名を手渡しました

（副理事長　高橋千佳）

東日本大震災　復旧・復興のとりくみ

みやぎ県南医療生協

● 福島原発事故の被災地（富岡町）を視察

７月７日（月）、しばた協同クリニックの創立記念日（休診）に合わせ、職員 14 人で、福島原発事故被災地富岡町を視察してきました。

行きの時間を利用し、「放射線って何だろう」「今回の原発事故で何が問題となっているのだろう」といった内容を詳しく、資料と DVD で学習をしながら視察に備えました。

富岡町は、震災当時のまま止まった空間が広がり、他の被災地域（津波による）とは比べものにならない状況です。

福島原発事故後の被災地を初めて視察する職員も多く、業務に追われ、あの未曾有の大震災すら忘れがちになっていましたが、今回の視察で再度奮起したようです。

「目にみえない放射能の危険性を学び、現状をきちんと知り、自分たちの生活を守るためにもこのまま黙っていてはいけない！」今回の視察で感じたことを、多くの人に発信し、原発ゼロ運動へつなげていきたいと感じる視察でした。

（専務理事　小山茂樹）

浜通り医療生協の伊東理事長からお話しを伺いました。

震災時のままの家

東北大学生協

● 「塩竈仲卸市場でブランチ＆塩竈の塩巡りツアー」

東北大生協教職員院生組織委員会では年 2 回、震災復興企画しています。今回は、被災地で買い物をすることが地域経済の復興の手助けになると考え、6 月 28 日（土）「塩釜仲卸市場でブランチ＆塩竈の塩巡りツアー」を開催し、組合員と組織委員の 28 人が参加しました。

塩釜の仲卸市場で新鮮な魚介類を調達して、市場内でそれを載せた丼を作り大変おいしくいただきました。

次に、塩竈の藻塩を製造している「顔晴れ塩竈」を訪問し、縄文時代頃から行われているという塩竈での塩作りの説明と、この工場の被災から復旧に至るまでのお話しをお聞きしました。震災時は、竈も工場も全て浸水し、その中で、周りのお店に元気を取り戻してもらうために、まずは自分の工場を復旧させようと努力されたそうです。

その後、数ヶ所を訪問し終了しました。参加者からは、「とても勉強になる企画を提供してくださり、ありがとうございました。楽しかったです（院生）」「今後も続けて欲しい（職員）」等、感想が寄せられました。

藻塩工場で説明を聞く参加者

秋には 3 組織（学生、教職員院生、留学生）合同で、取り組みが計画されています。

（理事会室　柘植邦宏）

東日本大震災　復旧・復興のとりくみ

大学生協みやぎインターカレッジコープ

● ～東日本大震災復興再生めざして～
未来の大学生を応援「大学生協仙台会館募金バザー」

震災後から、東北の大学生協は「未来の大学生応援募金」に取り組んでいます。

この一環として、仙台会館に事務所を置く“東北事業連合・同労組・東北ブロック・みやぎインカレ”は、4 月にバザー実行委員会を立ち上げ、7 月 7 日（月）12 時から 14 時まで「大学生協仙台会館募金バザー」を開催しました。

弘前大学生協のオリジナル商品「アップルケーキ」（定価の内 100 円が募金）の販売や、お菓子の詰合せ、新鮮野菜、提供品、クッキー付コーヒーなどを用意し、仙台会館の職員や会館以外の方など多くの来場がありました。多くの方々のご協力で、バザーの募金額は、58,391 円になりました。

「未来の大学生応援募金」は全国に拡がっており、立命館大学生活協同組合から 718,525 円の募金が寄せられました。

（専務理事　青柳範明）

買い物で未来の大学生を応援する
会館職員たち

大学生協東北事業連合

● 大学生協東北ブロック主催 「ふくしま被災地訪問（南相馬市）」

6 月 22 日（日）学生・教職員・生協職員 44 人の参加で、「ふくしま被災地訪問」を開催しました。

震災後約 1 年間警戒区域に指定されていた南相馬市の小高区内をまわり、住民が居住していない街を実際に見てきました。

震災時から自転車が放置されたままの駅前駐輪場、商品や棚が転倒したままの店舗、使われないままの駅舎や鉄道等、震災時から時間が止まってしまったような現実を目の当たりにさせられました。

「みんな共和国」の取り組みについて
説明する高橋慶さん（中央）

次に、原町区では震災後子どもたちのための遊び場づくりが進められてきた高見公園を訪れ、その取り組みの中心で活動してきた「みんな共和国」の代表である高橋慶さんの話を聴きました。震災後間もない頃の南相馬の子どもたちの状況を知ることができただけでなく、これから行える支援についても考えさせられるお話でした。

今回の訪問は、被災地の過酷な状況を見るだけにとどまらず、未来を担う子どもたちのために奮闘する人たちの姿を知る企画ともなりました。

（東北ブロック事務局長
田中康治）